

# 歌に込めた不屈の人生

松本侑壬子・ジャーナリスト

フランス語が苦手なせいか、シャンソンの歌詞にどれほどの真情が込められているのかを知らなかった。あるいは、演歌などで男性歌手が女の恨み節のような歌詞を歌い上げるのを単なる“お約束”のように聞く癖が無意識のうちに身につけてしまっていたのかもしれない。

この映画で、名前だけはよく知っていたシャンソン歌手エディット・ピアフの壮絶な人生(1915年～1963年)とともに、歌が人生そのものであることに深い感動を覚えた。歌の内容は、ピアフの愛の体験であり思いであり、それを本人が歌詞にし、歌っているのだ。とりわけ代表作『愛の讃歌』の愛の激しさ、喜び、そして切なさは観客に感染する。もちろん、他人の作詞・作曲のものもあるが、それでも「私の人生」と本人が納得する内容なのだ。聞くうちにピアフの不屈の人生への共感と励ましを得た思いが込み上がる。

ピアフとは、フランス語でスズメの意、と聞けば、日本では美空ひばり(1937年～1989年)を連想する。いずれも国民的歌手にしては、つつましく庶民的な芸名だが、共に少女期のデビュー環境と関係がある。ピアフの場合、幼いころから大道芸人の父について歩き、街角で歌って日銭を稼いだ。小柄で庶民的で、抜群に歌のうまい少女にスズメの芸名を与えたのは、街角で彼女をスカウトしたパリの一流クラブのオーナーだ。二人とも40代と50代の若過ぎる晩年には、入退院を繰り返しながら死の数か月前まで舞台に立った。まさに、命がけで歌の人生を全うしたスズメとひばりだった。

しかし、大きく違うところは、ピアフの愛憎の

激しさである。母親との確執も手加減がない。歌で自活できるようになった16歳のエディットに、浮浪者まがいの姿の実母が施しを乞う場面がある。「一曲歌うから恵んでよ」とすがる母親を冷たく拒否し、罵る母親を振り切って立ち去る娘。「一卵性母娘」と呼ばれた運命共同体的なひばり母娘とは対照的である。

ピアフは47年の短い生涯に、有名なイヴ・モンタンやシャルル・アズナブールを含めて二十数人もの恋人をもったと言われる。中でもピアフの「一生の男」は、1947年ニューヨーク公演時に出会ったモロッコ出身のボクサー、マルセル・セルダン。翌年にはミドルウェイト級世界チャンピオンの座を勝ち取った強くてハンサムな紳士に、身も心も虜になってしまった。しかし、マルセルには妻子があり、禁断の恋に悩みながらピアフがマルセルへの狂おしいほどの愛の思いを書き綴ったのが名曲『愛の讃歌』である。マルセルはピアフの待つニューヨークに向かう途上の飛行機事故で帰らぬ人となる。その同じ時刻、マルセルの魂がベッドでまどろむピアフを訪れて…。幸福の絶頂から絶望の奈落へ。そこからマルセルに導かれるように、ピアフはまばゆい舞台上に立ち、『愛の讃歌』を絶唱する—4分間のワンカットシーンに歌姫ピアフの気丈な心意気が光るすばらしい場面である。

映画の終わりにピアフは歌う。“いいえ、私は何ひとつ後悔していない、人が私にしたよいことも、悪いことも…”(『水に流して』)。ピアフが「これこそ私の人生そのもの」と言う潔い歌だ。歌に命あり。自分も頑張ろうという気になる。



フランス映画(140分)／オリビエ・ダアン監督

## 『エディット・ピアフ～愛の讃歌～』

9月29日より有楽座他全国拡大ロードショー

